



故 今野 淳（このの きよし）先生 御略歴

1924年（大正13年）5月19日 宮城県遠田郡（現大崎市）で生まれる
2019年（令和元年）5月3日 宮城県仙台市でご逝去（行年96）

御略歴

【学歴・職歴】

昭和 23 年	東北大学医学部卒業, 1 年間のインターンを経て
昭和 24 年	医師国家試験合格
〃	東北大学抗酸菌病研究所 (現 加齢医学研究所) 内科学部門研究生
昭和 25 年	東北大学抗酸菌病研究所内科学部門助手
昭和 40 年	東北大学抗酸菌病研究所内科学部門助教授
昭和 48 年	東北大学抗酸菌病研究所内科学部門教授
昭和 49 年	東北大学抗酸菌病研究所附属病院院長 (～昭和 57 年)
昭和 59 年	東北大学抗酸菌病研究所所長 (～昭和 62 年)
昭和 63 年	東北大学名誉教授
〃	公立学校共済組合東北中央病院院長 (～平成 7 年 3 月)

【学会関係歴】

日本化学療法学会	評議員 (昭和 44 年～) 第 29 回日本化学療法学会東日本支部総会会長 (昭和 57 年) 功労会員 (平成 8 年～) 名誉会員 (平成 18 年～)
日本結核病学会	理事 (昭和 50 年～平成 2 年) 代議員 (昭和 50 年～平成 2 年) 編集委員 (昭和 50 年～平成 2 年) 第 56 回日本結核病学会総会会長 (昭和 56 年) 功労会員 (平成元年～) 名誉会員 (平成 6 年～)
日本感染症学会	評議員 (昭和 45 年～) 功労会員 (平成 13 年～)
日本老年医学会	第 18 回日本老年医学会総会準備委員長 (昭和 51 年)

【受賞歴】

昭和 39 年	日本細菌学会浅川賞
昭和 42 年	日本胸部疾患学会 (現 日本呼吸器学会) 第 1 回熊谷賞
昭和 55 年	日本 ME 学会 (現 日本生体医工学会) 論文賞
平成 9 年	第 48 回結核予防全国大会・結核予防功労者賞
平成 13 年	勲三等瑞宝章

今野 淳（きよし）先生を偲んで

今野 淳先生との出会い

私が最初に今野 淳先生にお目にかかったのは1974年の秋、福島県会津若松市の竹田総合病院における研修医のローテート1年目に配属されていた呼吸器科の病棟でした。その前年、呼吸器科部長先生が短期間、国立がんセンター（当時）に国内留学した際、今野先生の教室の医局員が出張して呼吸器科の業務を担っておられた（これを東北大学では「トランク」と称しています）縁があり、呼吸器科部長が短期留学から戻っても月に1回の病棟での教授回診を続けておられたのです。45年前の当時ですから、前日に会津若松市の東山温泉にある病院所有の職員保養所（小さな温泉旅館を買い取ったもの）に泊まれるのですが、希望する研修医が夕食のお相手をしていました（研修医が教授と差し向かいでお話できる機会は減多にありません）。私は、2年間の研修後は内分泌学の研究室に行こうか？とも思っていました、配属された呼吸器科で気管支鏡や気管支造影などの諸検査、顕微鏡を使つての喀痰グラム染色・がん細胞診検査などに興味を持ち、病棟では肺がん患者の次に多い肺炎等の呼吸器感染症の患者、あるいは結核病棟の入院患者を受け持つことに学問的興味を覚えました。卒業前の医学部学生時代には、養殖漁業の飼料に混入されていた抗菌薬による耐性菌増加の問題点をテーマとした公衆衛生学のフィールドレポート「養殖漁業における薬剤投与の問題点」が担当教授の目に留まり、手直しして頂いて総説論文として「保健の科学」誌に掲載させていただいていたこともあり、また、当時は新規の抗菌薬が次々と実用化され始めていた時代ですから、一挙に感染症学と化学療法学の世界に引き込まれました。研修医になってから眠っていた学問的興味が目を覚ましたのです。ですから、今野先生のお食事（お酒もだいふ飲まれていました）のお相手をしているうちに内分泌学への興味はどこかへ飛んでいき、1年半後に入局先を決める時にはもちろん、今野先生の抗酸菌病研究所内科学教室を選んでいました。

今野先生のご業績（Science 誌論文など）

今野先生の業績は枚挙にいとまがありません。教授になられてからの指導者としての仕事は数多く、当時増えつつあったグラム陰性桿菌による日和見重症感染症に対する β -ラクタム系薬とアミノ配糖体系抗菌薬併用療法の確立、多数の新規抗菌薬開発における全国規模や東日本規模の研究班の組織化と臨床開発の遂行、内科的肺がん治療の共同研究班の組織化と抗がん剤等の臨床開発への参画、放射性同位元素を用いた肺血流シンチグラフィによる肺血栓・塞栓症の診断法の開発や気管支線毛運動の画像診断法の開発、線維症肺におけるコラーゲン線維形成に先行する硫酸化グリコサミノグリカン（GAG）画分変化の発見、アスベスト粉塵が誘因とされる胸膜中皮腫に対する特異的GAG分解酵素を用いた特異的診断法の確立、などの業績が教室から生み出されるのを指導され、NEJM誌やLancet誌に掲載された論文も複数数を数えます。

ご自身の最大の業績は、教授になられる20年以上前のヒト型結核菌の鑑別法であるナイアシンテストの創出であり、医学部を卒業されて数年後の業績です。培地上に発育する抗酸菌を結核菌と非結核性抗酸菌とに鑑別する方法は、今でこそ核酸増幅法が広く使われていますが、それが実用化されるまではこのナイアシンテストがゴールドスタンダードであり、欧米の教科書には「Konno's test」と記載されていました。今野先生は、ヒト型結核菌のみが培地上に多量のニコチン酸を遊離することを見出され、それを定量・呈色反応で簡便に検出する方法を創出されたのです。研究室での実験が何度も失敗し、その原因を探っていく内に全く新規の知見を得られたのであり、それを簡便で役に立つ検査法に確立されたのですから、大きな反響を呼びました。論文は「New chemical method to differentiate human-type tubercle bacilli from other mycobacteria」としてScience 124: 985, 1956に掲載されました。世界各国から講演の依頼が相次ぎ（昭和30年代に、です！）、昭和30年には米国マサチューセッツ州Tufts大学医学部講師として、同様に昭和40年にはNew York市Cornell大学医学部Visiting Professorとして研究指導にあたられました。

こうした幅広い研究を背景に、主に感染症学、化学療法学、呼吸器病学、結核病学に関して国内外から多く

の講演依頼があり、現場の臨床医に対する教育・啓発に長く尽くされました。また、複数の学会で多くの役職を務められると共に、化学療法学会や結核病学会、老年医学会の学術集会の会長や準備委員長を務められ、広く後進の育成にあたられました。定年で教授を退かれてからは公立学校共済組合東北中央病院院長に就任され、改・新築事業を主導されて同病院の発展に貢献されました。こうした数々の業績が評価されて、平成13年に勲三等瑞宝章を受章され、盛大な記念祝賀会が開催されましたが、私たちは先生の幅広い交友関係を知ると共に、先生の教えを基礎的・臨床的研究に生かしていくことこそが今野先生から課された宿題であったことを改めて肝に銘じたものでした。

今野先生、長年にわたって私たちをご指導いただき、本当にありがとうございました。先生がお持ちの探究心と先見性、思い、包容力は私たちの心に深く刻み込まれています。今野先生の薫陶を受けた者の一人として、これまで以上に大きく先を見据え、大きな夢を持って感染症学、化学療法学、結核病学を中心とする基礎研究・臨床研究の発展に貢献していきたいと思えます。今野先生、どうぞゆっくりとお休みください。心より、ご冥福をお祈り申し上げます。

東北文化学園大学特任教授 兼 公益財団法人宮城県結核予防会理事長
名誉会員 渡辺 彰